

宇都宮国綱書状

(当館寄託 関一恵家文書二四九七)



【釈文】

急度啓候、仍南軍新田普請、来礼候上、
一兩日中皆川へ可移陣由、手堅其
聞得候、至于其儀者、即剋可被打出、支度
不可有由断候、敵陣間近「
」調儀、不可移時
日候、有猶予者、不可有曲候、恐々謹言、

(天正一三年)

二月十二日 国綱 (花押)

西方太郎左衛門尉殿

【大意】

間違いなく伝えます。「南軍」(北条軍)が由良国繁の上野新田金山城(群馬県太田市)を攻略して普請を施しました。二・三日中に下野の皆川領(栃木市)へ攻め込むのはほぼ確実でしょう。もしそうなった場合、すぐに応戦できるよう、出陣の支度を調べておきなさい。北条軍の来襲も間近です。準備を怠らないようになさい。

【史料の説明】

中世下野最後の当主である国綱が、天正十三年二月に、一族で西方城(栃木市)城主である西方太郎左衛門尉(綱吉)へ宛てた書状です(当館寄託「関一恵家文書」No.二四九七)。料紙の大きさは、縦二〇・七×横二五・七で、楮紙が使用されています。また、日付より上付近には、国綱の花押の墨移跡が確認できることから、戦国期東国でよく見られる横内折り(はじめに料紙文字面を内側に折って横折りする)の書状であることがわかります。

天正六年(一五七八)頃に宇都宮家の家督を相続した国綱は、独立の地域権力として生き延びる道を模索します。常陸の佐竹氏、下総の結城氏らと軍事同盟を結び、政治情勢の変化に応じて、東国の有力大名である織田信長・徳川家康・上杉謙信・豊臣秀吉ら

と連携することで、北条氏の外圧に対抗しました。

北条氏の攻勢が激しさを増す中、天正十二年四月下旬から七月上旬にかけて、北条軍と佐竹・宇都宮・皆川・佐野・由良・結城氏などの北関東の反北条方領主が沼尻（栃木市藤岡町）で激突します（沼尻合戦）。この年七月半ばには両勢力の講和が成立しますが、十二月末頃までには、北条氏が上野の新田金山城と館林城（群馬県館林市）を攻略して接收し、天正十三年になると再び下野への侵攻をはじめました。沼尻合戦後の北関東の政治情勢は、上野に拠点を固めた北条氏側が優位となっていたのです。

本書状は、こうした北条氏の外圧下で、迫り来る北条軍を迎え撃とうとする宇都宮国綱と西方綱吉の緊迫した対応が読み取れるものです。激動の戦国期下野の様相を示す、貴重な史料と言えるでしょう。

なお、史料の転載等をご希望の方は、文書館まで直接お問い合わせください。

【参考文献】

・西方町史編さん委員会編『西方町史』（西方町、二〇一一年）